成蹊学園広報

SEIKEI

2010 Spring vol.77
SEIKEI GAKUEN

新年度のごあいさつ
成蹊学園の新たな創造に向けて

新企画 百年十話 ―成蹊学園の歴史―
成蹊学園創立100周年 記念事業特集（情報図書館）

インタビュー 桃李の人々

雅楽師
東儀 秀樹

独自性を認め合う環境で学んだことが
常に新たなジャンルに挑戦する
私の活動の「原点」になっています

Contents

2 新年度のごあいさつ（理事長／学長・校長）
6 桃李の人々（東儀 秀樹）
9 成蹊教育のいま（佐藤 尚衛）
10 百年十話 ―成蹊学園の歴史―
12 成蹊学園創立100周年 記念事業特集（情報図書館）
14 大学の近況
16 中学・高等学校の近況
17 小学校の近況
18 募金局だより
21 2010年度事業計画・予算の概要
22 2010年度入学試験結果
23 学園トピックス／学園組織・役職者一覧
24 成蹊教育を知る

Series 成蹊教育を知る

蹊。

「綴り方教育」の先達 ―桂田金造―

大正時代、初等教育において「綴り方教育」が盛んになっていましたが、創立期成蹊小学校の「綴り方教育」も当時の情勢に大きな影響を与えていました。今回はその活動の中心的人物である成蹊小学校創立当初の訓導（教諭）、桂田金造を紹介します。

桂田は一八八四（明治一七）年に生まれ、一九二一年に滋賀県師範学校を卒業後、一九一六（大正五）年に中村春二に請われて成蹊小学校に着任し、成蹊国語教育の中核を担いました。成蹊教育の機関誌『新教育』にも退職するまで毎月のように寄稿し、中村が信頼をおいた訓導の一人です。一九二九年に夫人急逝のため退職後、雑誌『小学少年』の主筆を務め、多くの著書を残しながらも一九三四年に満三九歳の若さで逝去しました。著書に『尋常一年の綴り方』／成蹊學校／一九二七年などがあります。

大正時代に芦田恵之助（あしだえのすけ）と友納友次郎（とものうともじろう）との間で、初等教育界全体を巻き込み「自由に題を考えて書くか、課題を与えて書くか」という「随意選題論争」が起こっていました。この二つの考え方とは、端的にいえば「綴り方教育」において「ことばの学びを通した人間教育」、「ことばの知識習得、書き方の練習」、どちらに重点を置くかということで、芦田と成蹊は前者の立場をとっていました。芦田は成蹊教育に共感を寄せ、桂田と中村を有力な同志とみなしていたのです。『尋常一年の綴り方』にも「親友桂田君へ」と序文を寄せています。

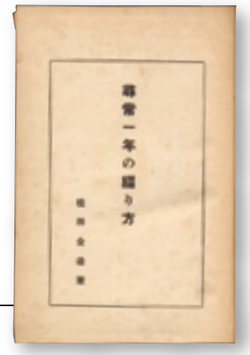
桂田は『尋常一年の綴り方』において、こう述べています。

「今日の綴り方の教授に於ては、文章をどう書けばよいか…などと、方法にばかり腐心しているのではないかと思はれる。…単に文章の形を見て、よい、悪いを云ふのは間違っている。その人の心の生活に触れているかいないか、如何なる経験によって生れたものであるかを考へた後、良否をさだめなくてはならない。」

滑川道夫（なめかわみちお）（※）は、この桂田の主張を「文章主義や写生主義を克服して、綴り方は生活に立脚する自己の発表、ただそれ以外の何ものでもないと喝破している。」と高く評価しました。

現在は語られることも少ない桂田ですが、その存在は名著『尋常一年の綴り方』と共に成蹊創立期の貢献者として長く語り継がれるべきでありましょう。

（成蹊学園校医 上田祥士）



（写真）左上：桂田金造氏
右下：『尋常一年の綴り方』

※元成蹊小学校訓導、主事、成蹊学園教育研究所所長

100th ANNIVERSARY 1912-2012

成蹊学園広報
2010年4月1日 発行
学校法人 成蹊学園総務部広報課
東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1 電話（0422）37-3517
URL http://www.seikei.ac.jp e-mail koho@jim.seikei.ac.jp

FSC ミックス品
FSC認証林および管理された森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SGS-COC-003520
© 1996 Forest Stewardship Council

成蹊学園の新たな創造に向けて

専務理事あいさつ

新年度を迎えて
―学園の現状と課題―

成蹊学園 専務理事
加藤 節　Takashi Kato

新しい年度を迎えるにあたりまして、成蹊学園への一層のご理解、ご支援をいただくために、関係者の皆さま方に学園の現状と課題とをご報告したいと存じます。

学園は、この数年にわたって、さまざまな改革事業を積極的に推進してまいりました。その事業が「新・成蹊創造プラン」と命名されている事実が示しておりますように、そこには、これまでの伝統を生かしながら、二十一世紀における学園の確固たる礎をあらためて築き直そうという意図がこめられておりました。その場合、改革の方向は、「成蹊学園二十一世紀構想検討委員会」を中心として行われた長い検討を経て学園全体の教育理念として採択された「個性を持った自立的な人間の創造」を各学校がどのように実現するかに置かれました。次のような改革の具体的な成果は、いずれも、そうした方向に沿ったものでありました。小学校における二十八人学級制の実現、中高一貫性の強化、大学情報図書館の新設、学園横断的な国際教育センターの開設は、国際化と情報化とが進むなかで、それぞれの世代が、自らの個性を発見し、陶冶して、自らが進むべき道を自立的に選択する力を身につける機会を提供しようとするものであったからです。今年度から大学で開始される成蹊教養カリキュラムも豊かな教養と学生一人ひとりの個性とを結びつけることを意図したものであり、また、昨年末に終了した「けやきグラウンド」の全面的な改修も個性の重要な要素をなす運動能力の伸長を図りたいとの希望に出るものであって、いずれも成蹊教育の基本理念と関連するプロジェクトにほかなりません。

このように、学園は、創立者中村春二先生の精神に汲んで「個性を持った自立的な人間」を創造しようとする一貫した教育理念のもと、一歩一歩着実な改革を実現してまいりました。少子化を背景として各学校間の競争が激化するなか、成蹊学園を構成するそれぞれの学校の入学志願者数が増加傾向を維持していることから判断しましても、学園と各学校とが一体となって取り組んできたこれまでの改革事業が、学園全体の声価の向上に貢献してくれたのではないかと考えております。その意味で、学園は、現在、おそらく学園の歴史のなかでもあまり例がないような大きな改革を進めながら、順調な歩みを続けていると言っていいかと思います。

しかし、「新・成蹊創造プラン」の実現計画が最終段階に入った現在、学園が新たな課題に直面していることも事実です。それは、大きく分けて三つあろうかと思います。第一の課題は、一連の改革事業でやや体力の弱った学園財政の立て直しを図ることです。学園は、今回の改革のための総事業費約百五十八億円を、一切の借入なしに、計画的に積み上げた学園の基金、三菱金曜会を中心とする企業や多くの卒業生からのご寄付、そして、在校生の保護者からお寄せいただいた教育充実資金によってすべてまかなってまいりました。その点から見ましても、学園の財政状況は健全に推移してはおりますが、たとえば、なお残されているいくつかの学園施設の耐震工事といった大きな事業に直ちに着手するような余裕が失われてきていることも事実です。そのため、学園財政の強化を図りながら、将来に備えた基金積立計画の策定と実施とに早急に着手しなければと考えております。

学園が直面している第二の課題は、二〇一二年にめぐってくる学園創立一〇〇周年の記念事業となる各種のプロジェクトを立ち上げ、それを着実に実現して行くことです。私どもは、学園創立一〇〇周年を、長い歴史のなかで培われてきた成蹊学園の力を内外に向けて発信するとともに、成蹊学園が目指しているものを宣言する絶好の機会だと思っております。そうした判断のもと、学園関係者のご協力をいただきながら、「『心の力』を、未来へ」を基本的なコンセプトとして学園創立一〇〇周年を記念するさまざまな事業に学園を挙げて取り組んで行く決意でおります。それらの事業につきましては、皆さまに積極的にご参加いただくために、内容が固まり次第、学園広報を通して順次お伝えしていきたいと思っております。

この第二の課題とも関連して、我々には第三の課題が課せられております。それは、成蹊学園の未来像をあらためて構想する作業に着手することにほかなりません。先にも少しふれましたように、この数年間にわたって推進されてきた「新・成蹊創造プラン」は、「成蹊学園二十一世紀構想検討委員会」の答申「二十一世紀における成蹊学園の新たな創造に向けて」（二〇〇〇年七月）でなされた各種の提案を具体化するものでした。しかし、それは、学園改革のために同答申でなされたすべての提案を実現したものではなく、まだまだ手つかずに残されている問題も少なくありません。その意味で、私どもは、何が達成され、何が残されているかを検討し直しながら、残された問題の克服を中心とする学園の将来像を確定し、次の一〇〇年に備える作業を開始しなければならないと思っております。学園のそうした姿勢に対する皆さまのご理解とご支援とを切にお願いして、私からのごあいさつといたします。

新年度を迎えて

学長・校長あいさつ

学長就任のごあいさつ

成蹊大学長
亀嶋 庸一　Yoichi Kamejima

本年四月一日より学長に就任いたしました。

私は、成蹊大学法学部および大学院法学政治学研究科を卒業し、その後成蹊大学に着任し今日に至っています。これまで学生および大学院生として多くのよき師と友人にめぐりあい、また教師として大勢の学生たちと接してまいりました。私自身、成蹊で本当に恵まれた、そして充実した日々を過ごすことができたことを大変嬉しく思いますし、また創設以来、実業界はもとより内閣総理大臣から著名な作家や俳優にいたるまで、実に多くの多彩な人材を輩出してきた学部、大学の卒業生の一人であることに強い誇りを持っています。この度、母校の学長に就くという大変名誉ある機会と重責を賜り、大いに緊張していますが何卒よろしくお願いいたします。

次の一〇〇年に向かって

今年度は、栗田前学長のもとで全学的に取り組んできた成蹊教養カリキュラムと、装いを新たにした各学部の専門的な固有カリキュラムがスタートする年であり、そして二年後にはいよいよ学園創立一〇〇周年を迎えることになります。私に課せられているのは、新しいカリキュラムを円滑に実施するとともに、大学の教職員、学生、卒業生がそれぞれ力を合わせて一〇〇周年記念事業を大いに盛り上げ、お互いの一体感を改めて強めるとともに、次の一〇〇年に向かって力強く歩みだすための新たな体制を築くことにあります。昨今、大学をめぐる内外の状況は確かに厳しさを増していますが、私は成蹊大学がこのような困難な時期において右記の課題を達成していくために、成蹊のよき伝統に則り大学の個性と理念を堂々と堅持しアピールしていくべきであると強く確信します。

人的資産と伝統の活用

成蹊大学に着任して以来、全学的な会議や委員会への参加を通じて多くの教員やさまざまな部署の職員の方々と仕事をともにし議論を交わす機会を持ち、また授業や学生団体の顧問などを通じて多くの学生とも接してまいりました。そうした経験によって改めて気づかされるのは、成蹊の教職員や学生の意欲と能力の高さであり、それこそが「人を内面からつくり上げる」ことに、そして豊かな人間性を育むことに重点を置いてきた、大学や学園の教育と運営のよき伝統が生みだした成果にほかならないということであります。学園創立一〇〇周年記念事業とは、成蹊がこれまでの長い歴史をかけて築いてきたそうした財産を守り、さらにいっそう育てていくことに、その本来の使命があることはもとよりいうまでもありません。成蹊がこれからも今まで以上の評価を受け注目されていく上で、そうしたよき人的資産と伝統の有効な活用がますます重要なものとならざるをえないでしょう。それ故にこそ、少数教育にもとづく大学固有の理念を堅持して、教員および職員によるきめ細かなサービスを学生に提供し、学生の自主的で活発な勉学や活動を積極的に支援することによって、成蹊がこれまで育んできた貴重な財産をいっそう豊かなものにしていくことこそが今求められているのです。

地域との共存

その点に関連して、私が常々思っていることがいくつかあります。その一つは、地元である吉祥寺と成蹊のことです。吉祥寺という街は私が入学した頃と今とでは大きな違いがありますが、当時から変わらないのは、それが洗練された文化と昔ながらの武蔵野の風情とが見事に共存したきわめて魅力的な空間であるということです。学者や作家、芸術家の住む町であると同時に、ジャズや若者の文化でにぎわうファッショナブルな街であり、また閑静な住宅街でもあるという多様な側面が秩序を保って同居しているこの文化地域に成蹊大学が存在しているということがもつ価値は、計り知れないほど大きなものがあります。世界の歴史ある多くの美しい大学町と同じように、この恵まれた立地条件をもっと生かして、地元とのつながりをこれまで以上に深め吉祥寺の文化的発展に積極的に寄与していくことが、成蹊大学の今後を考える上で重要な課題の一つであるといえるでしょう。

成蹊大学の原点確認

私が感じているもう一つのことは、大学全体の自由な活気がもつ重要性です。成蹊大学のキャンパスは、この十五年ほどの間に教室も、研究棟も、図書館も、そしてグラウンドもきれいに生まれ変わりました。しかし、きれいな施設や理想的なカリキュラムができただけではまだ大学とはいえません。大学とはまずなによりも学生相互の、そして教職員との間の自由で活気ある人格的関係があって初めて成立するものだからです。成蹊大学のすばらしい施設が、本来人々のそうした活動をより活性化するためにつくられたものであることはいうまでもありません。私は、この大学のあるべき原点を改めてもう一度確認し、成蹊大学を創造的エネルギーと活気に満ちた文化空間としていっそう発展させていくことこそが、今大学に課せられている重要な課題の一つであると考えています。

以上が私から皆さまへのごあいさつの言葉ですが、卒業生や保護者の方々におかれましては大学が置かれた現状と課題につきご理解をいただき、成蹊大学の発展に力をお貸しくださるようお願い申し上げる次第です。

昔も今も

成蹊中学・高等学校長

両角 雄功　Yuko Morozumi

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ならびに保護者の皆さま、誠におめでとうございます。謹んでお祝い申し上げます。

新しくなった中学・高等学校の校舎や人工芝のけやきグラウンドのすばらしい環境とともに、教職員一同、皆さんを心より歓迎いたします。

受け継がれる伝統

さて、校長室を整理しておりましたら、昭和三十五年前後の学校要覧が出てきました。成蹊学園の略図を見ると、現在の理工学部の場所が四〇〇メートルグラウンド、現在のけやきグラウンドの場所には二〇〇メートルグラウンドとバレー・バスケットのコートがあり、体育館はまだありませんでした。要覧の中には成蹊中学校の四季という紹介がありました。『春』新入生歓迎会に高尾山方面への全校遠足。三年生の五泊六日の京都・奈良への修学旅行。『夏』夏の学校。『秋』大運動会と十一月に行われていた文化祭。『冬』スキー訓練にマラソン大会。多少、中身の違いはあれ昔の伝統は今も受け継がれているのだと実感しました。そして、生徒の作品も収められていました。その中の一つに「けやき並木」という作品がありました。作者の方には失礼かとは存じますが掲載させていただきます。

けやき並木
ところも知らず名もしらず
もとより
われを背にする人も知らず
秋のほのかな風を知っていた

けやきの落葉をカサカサと踏みながら、一年生の女生徒が、竹内てるよの「流星」の詩を口ずさみながら並木道を歩いていく。ふと見あげると、葉の落ちたけやきのこずえは、針のように細い枝を空に向けている。がっしりとした太い幹とこずえの対照。

ぼくは、ふうっと深く息をした。大樹の美しさをしみじみと感じた。よく、先生から大樹の永遠性という話を聞かされたが、今、改めて、はだかになったけやきをみて、ほんとうにそうだと思った。

ぼくたちは、このけやき並木の道を何百回通ったことだろう。春のけやき並木は、むせるような緑の門であった。夏は作業につかれたからだを、いく度この日かげで休めたことだろう。そして、今は鮮やかな秋のけやき道。

ぼくたちにとって、このけやき並木は学校と同じだ。学びの門だ。この道を通るたびに、いろいろなことを考え、そして教えられる。独歩の「武蔵野」の中に「山林に自由存す」という言葉があるが、ぼくは「けやき並木に自由存す」といいたい。朝夕、美しいけやき並木の道を通って学ぶことのできるぼくたちは、ほんとうに幸福だと思う。

けやきのこずえのような細かなするどい感受性を、そしてあの幹のように落ち着いたたくましさを、そんなことをぼくは思うのだ。

（三年生作品）

才能を自覚し、伸ばせる環境に

大正十三年に池袋から吉祥寺に移転してきた時に教職員と生徒が植樹したけやきは昔も今も生徒の登下校を温かく見守っています。より高い学習効果のための教育環境も整備されてきました。時代とともに社会を取り巻く環境は変わってきていますが、成蹊学園の建学時からの教育理念「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」は今また重要であると言えるでしょう。人生は勝負事ではないはずなのに、いつの間にか日本では「勝ち組」「負け組」という呼び方が定着しています。そして、生き方の内容ではなく、お金や物で人生の価値を決める傾向が強くなり、それにつれて、自己中心的な生き方がまかり通るようになってきています。中学校時代は自分の得意なこと、才能を自覚する時です。そして高校は自覚した才能を将来に向け伸ばす時であり、人生で何を目指すかを決める上で最も重要な時期です。結果だけを求めることが多い現代社会のなかで、成蹊中学・高等学校では生徒自らの才能を自覚し、伸ばす環境づくりに教職員一同、力を注いでおります。

今後ともご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

一身の栄えのみを念ぜず

成蹊小学校長

金納 善明　Yoshiaki Kinno

新入生の皆さん、そして保護者の皆さま、ご入学にあたり心からのお祝いを申し上げます。

成蹊小学校は、四学級編成に対応した施設再開発も一段落し、いよいよ少人数教育体制の成果が問われる段階となりました。

こうした変革期の小学校にあって、成蹊学園創立一〇〇周年記念事業募金をはじめとした多くの皆さまの変わらぬご理解とご協力が、私ども小学校教職員の日々の実践を支える大きな力となっておりますことを心より感謝いたしております。

「ワニに負けているのではないか」

二〇一〇年の小学校の始まりは、一月八日の三学期始業式でした。年頭の校長の話は、干支に因んだトラの話ではなくワニの話でした。

始業式での子どもたちへの語りかけの一部を紹介します。

＊　＊　＊

これは、小学校の先生をしている私の友達から聞いた話です。

その友達が、こんな話をしてくれました。

テレビで動物の実験をする番組を見たそうです。実験する動物は、ワニです。

最初に小さな赤ちゃんワニを捕まえて、その赤ちゃんワニを人間がいじめます。そのときの赤ちゃんワニの鳴き声をカセットテープに録音したのだそうです。その録音テープを持って、今度は野生のワニがたくさんいる沼に行きました。スピーカーを沼のほとりの藪の中に隠して、録音した赤ちゃんワニの鳴き声を大きな音で流しました。

どんなことが起きたのでしょうか。

おどろいたことに、どこからともなく次々と大きなワニが集まってきました。皆さんも、テレビで水面をすーっと泳いで獲物を狙っているワニを見たことがあるでしょう。

ところがそのときのワニは、大きな口を開けながら、赤ちゃんワニの鳴き声のする方向に突進したのだそうです。

たちまち大きな口を開けたワニの山ができあがり、必死で鳴き声の主を見つけようとするワニたちの映像がものすごかったそうです。

番組の中で、この実験をした学者は、『ワニは自分の家族であっても、家族でなくても関係なく、仲間の子どもをみんなで守るという習慣がある。だから赤ちゃんワニの鳴き声は仲間に助けを求める声だと気づいて、たくさんのワニが集まったのだ』と話していたそうです。

大人のワニに助けてもらった子どものワニは、自分が大人になると、きっと子どものワニを必死に守る立派なワニになるのでしょうね。

私は、この話を聞いて、最初にいじめられたワニは可哀想だなとも思いましたが、この実験でわかったこと…つまり、仲間のワニを必死で助けようとすることのほうが心に残りました。

皆さんはどうでしょうか。私たちの周りをよく見ると、困っている・悩んでいる・助けを求めている・悲しんでいる…そんなお友達がいるはずです。それに気づかない・気づこうとしないというのも問題がありますが、いちばん怖いのは「気づいても知らんふりをする」ということです。これでは、ワニと比べて人間のほうが負けていることになります。

皆さんは、ワニと同じですか？それとも、ワニに負けましたか？

ワニは、力が強くて乱暴であまり利口な動物だとは思っていなかったのですが、友達からこんな話を聞いて、ワニのことを考え直しました。

これを、新しい年の初めのお話にしたいと思います。

自分は、自分たち人間は、ワニなどの動物よりも、もっと、ずっと優れている生き物だと胸を張って言い切るためには、学級の仲間、友達とどのように関わったらいいのか、そのことを考えてみてほしいのです。私と廊下で出会ったとき、「おや、ワニに負けているぞ」と言われないように、しっかりとクラスの仲間を大切にしてほしいと思います。

さあ、この一年間、成蹊小学校のみんなで、ワニに負けないように生活しましょう。楽しみにしています。

＊　＊　＊

始業式では、このように多くの言葉を重ねて、子どもたちに仲間とともにあることの大切さを語りかけました。

仲間の苦境に気づいても知らんふりをするといった残念な現実が、子どもの世界にもあることを否定できません。小学校の教育目標が内包している「自立・連帯・創造」の子どもの姿を現出させる努力は、冒頭で述べた「少人数教育体制の成果」に繋がるものと考えています。

ワニのエピソードを語りかけながら、創立者中村春二先生が遺された「一身の栄えのみを念ぜず、常に世の為、人の為に思いを致すべし」という言葉の重みを改めて感じた新年の始まりでした。

本年度も、小学校教育に対する皆さまの変わりないご支援を、心よりお願い申し上げます。

インタビュー

桃李の人々 vol.25

卒業生ロングインタビュー

雅楽師

東儀　秀樹

Hideki Togi

雅楽器とピアノやシンセサイザーなどの現代楽器とのコラボレートで知られる雅楽師・東儀秀樹さん。テレビドラマ、CM、映画音楽などでも、マルチに活躍されています。バンド活動に熱中した成蹊学園時代の思い出と、後輩たちへの熱いメッセージを語っていただきました。

日常的に海外文化の話題で盛り上がる国際学級

―幼少期を海外で過ごされたのですね。

東儀　父が商社マンだった関係で、一歳から七歳までタイのバンコク、十一歳から十二歳をメキシコで過ごしました。帰国後、成蹊中学校の国際学級に入学しました。

―国際学級の印象はいかがでしたか。

東儀　一クラス五名前後の少人数制ですから、先生が生徒一人ひとりの性格を熟知されており、個々のタイプに応じて細やかに接してくださいました。先生と生徒の関係というより、家族のような雰囲気でしたね。体育の授業などは三学年合同で行われるので、自然に皆と仲良くなり、国際学級の生徒全員のことを兄弟のように感じていました。

　海外文化の息吹を感じながら育った友人が周囲に数多くいることも、とてもエキサイティングでした。子ども心に欧米への憧れがあり、ニューヨーク、ロンドン、ミラノなどに住んでいた友人たちに、現地でブームになっていた音楽の話などを聞くのが楽しみでした。同級生全員が「全米トップ40」（アメリカのビルボード誌で毎週発表されるシングルチャート）に注目していて、日常的にそんな話題で盛り上がる環境は、私にとって居心地のいいものでした。

高校時代はバンド活動に熱中　文化祭などでステージに

―かなり早い時期から音楽に興味があったのですか。

東儀　父がクラシック好きで、よくレコードを聴いていましたし、母もミュージカル鑑賞が趣味で、小さい頃からさまざまな童謡を歌って聴かせてくれました。そのため、自然に音楽が好きになり、幼稚園の頃にはもうビートルズに夢中でした。ちょっとませた子どもだったかもしれませんね。

　自分に特別な音感が備わっていることに気づいたのは小学生の時です。メロディーを一回聴きさえすれば、楽譜を見なくても、ピアノで再現することができる。それは私にとっては当然の技なのに、友人にはできない。それなりに特殊な能力であり、自分には音楽が向いていると意識するようになりました。かなり早い時期から、ピアノ、ギター、ドラムなど、さまざまな楽器が弾けるようになり、国際学級時代には同級生たちにギターを教え、結局、全員が弾くようになりました。

―高校時代はバンド活動に熱中されたようですね。

東儀　三～四のバンドを掛け持ちしていた時期もあり、ギター、ベース、ドラム、ボーカルなど、いろんなパートを経験しました。「カルメン・マキ＆ＯＺ」のコピーなどのハードロックや、ジャズを中心に演奏しており、市民ホールのコンサートや、文化祭のステージに立ちました。困ったのは文化祭に出演する時、先生の承認を得る必要があったことです。担任の斉藤義介先生に依頼したのですが、ロックに抵抗感を持つ可能性もあると思い、「演奏するのはバラードです」と嘘をつきました（笑）。当日見にくることはないだろうと思っていたのですが、気がつくと客席の後ろの方に先生が立っていらっしゃって、何とも気まずい思いをしました。実際にはヘビーなロックをやっていたからです（笑）。もちろん、先生の方ではそんなことは織り込み済みだったのでしょう。まったく叱られることはありませんでしたが……。

―そのほか、成蹊学園時代で思い出に残っていることはありますか。

東儀　私はスポーツも比較的得意で、スキー、スケート、スキューバダイビングなどを趣味にしていました。バレーボール部やバスケットボール部に勧誘されたこともあります。けれども、私のような帰国子女は、先輩後輩の上下関係を敬遠する傾向があって（笑）、先輩の指示に服従しなければならないこともある体育会系クラブには馴染めそうもありません。そこで写真部に入りました。今では写真家を目指したいと思うこともあるほど、カメラに夢中ですが、当時はきちんとした作品を仕上げたいという意識はそれほどありませんでしたが、暗室で印画紙に画像が浮かび上がる瞬間のロマンにわくわくしていました。それでも、文化祭で作品の展示が課された時には、ピアノを弾く手をスローシャッターで撮影し、手が透けて見えるようにするなど、それなりに工夫を凝らしました。自分の本分はあくまで音楽だけれども、たとえ写真であっても、適当なもので東儀秀樹を評価されては面白くない。だから絶対に異色の作品に仕上げなければならないと思っていました。常にアーティストでありたいという強烈な自負があったのでしょうね。

古典への敬意があるからこそオリジナルが生み出せる

―雅楽の道を志そうと思われたのはいつ頃からですか。

東儀　高校二年生の後半になると、仲間たちが受験体制に入り、バンド活動に熱が入らなくなっていきました。私はそのことに強い違和感がありました。皆、バンドに夢を抱いて、ずっと続けていきたいと思っていたのではなかったのかと。その時、自分だけは節を曲げず、音楽家を目指そうと決意しました。けれども、音楽的センスには自信を持っているものの、テクニックが不十分であることも自覚していました。というのも、どの楽器も独学である程度器用に弾けてしまうため、ピアノもギターも基礎から習ったことがありません。このままではプロとして通用するレベルではないので、誰かに師事して、テクニックを学び直した方がいいのではないかと悩みました。

　そんな時、母から「どうせ音楽の世界を目指すのなら、東儀家の血を引く者として、雅楽に挑戦してみるのもいいのではないか」と勧められたのです。その少し前から、私自身もそれも一つの道だという意識が芽生えていました。

―それはなぜですか。

東儀　幼少期を海外で過ごし、帰国後も国際学級で学んだことから、私には日本を客観的に見る感覚が養われていたように思います。外国人の日本に対する意識に敏感であり、日本人は海外でどうあるべきかを考え続けてもいました。その結果、当初強かった海外文化への憧憬の念が、次第に日本独特のものを大切にしたいという思いへと変化していったのです。

　そう考えると、私の祖先である東儀家は、千三百年もの長きにわたって雅楽を継承してきた家柄です。それをとても誇り高いものに感じるようになり、自分も全うすることがすばらしいことではないかと思えるようになったのです。

　それに、雅楽を志すからといって、ロックやジャズを捨てる必要はないとも考えました。むしろ、多様なジャンルの音楽に通じることによって、新たな可能性が広がるかもしれない。そんな夢も膨らんでいったのです。

―そこで、宮内庁の訓練機関で修業されたわけですね。

東儀　高校三年生の後半から、土曜日の午後、皇居に練習に通い、卒業後、正式に宮内庁式部職楽部の楽生科に入りました。それから七年間、週五日、朝から夕方まで、練習の日々でした。

―雅楽の魅力はどのようなところにあるのでしょうか。

東儀　雅楽は管楽器、弦楽器、打楽器で編成され、管楽器（笙、篳篥、龍笛）が主旋律を奏で中心的な役割を果たします。このように編成のしっかりした音楽システムとしては、西洋のオーケストラよりも古く、世界最古と言われています。にもかかわらず、まったく新鮮さが損なわれておらず、計り知れない可能性を秘めています。演奏していると、天、地、空、つまり宇宙をつくっているような感覚が生まれ、音色が空気のように肌から入り、細胞に直接語りかけているようにも感じられます。そんな壮大な宇宙観が生み出されるところに魅力を感じています。

東儀　秀樹（とうぎ・ひでき）

1959年、東京都生まれ。母は1300年の間、雅楽を世襲してきた東儀家出身。幼少期をタイ、メキシコで過ごし、成蹊中学校の国際学級に入学。高等学校を卒業後、國學院大学二部に通いながら、宮内庁式部職楽部の楽生科で雅楽を学ぶ。1986年から10年間、宮内庁楽師として活躍。1996年、ファーストアルバム『東儀秀樹』を発表し、雅楽器と現代楽器のコラボレーションで注目を集める。その後、大河ドラマ『篤姫』の孝明天皇役などのドラマ出演、『青の炎』などの映画音楽と、マルチな活躍を見せている。2005年に文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。著書に『雅楽：僕の好奇心』（集英社新書）、『すべてを否定しない生き方』（KKロングセラーズ）などがある。

―一九九六年にファーストアルバムを発表されて、雅楽器と現代楽器とのコラボレートで注目を集めました。

東儀　小さい頃にクラシック、童謡、ビートルズなどを聴き、高校時代にはロックやジャズのバンド活動をするなど、多様なジャンルの音楽に接してきた経験が、雅楽の可能性を広げる上でプラスになったと思います。

もっとも、オリジナルの音楽を生み出す活動をしていると、「結局、東儀は古典がそれほど好きではないのだろう」と誤解されることもあります。けれども、それは逆なのです。オリジナルの音楽や、さまざまなジャンルの音楽との融合に挑むほどに、古典雅楽への慈しみ、敬意が高まっていきます。私は誰よりも古典雅楽を愛しているという自信を持っていますし、いつでもすばらしい古典雅楽の演奏をしたいという意欲も強く持っています。私の中では、古典と新しいものがバランスよく交じり合い、お互いに刺激しあって、新たな回転が生まれている状態なのです。

日本文化を語れないようでは国際人として通用しない

―成蹊学園時代に学んだことが、その後の活動に生きていると感じられることはありますか。

東儀　成蹊学園の最大の魅力はフレキシビリティーにあります。多様なカラーの生徒が集まり、お互いに認め合い、絶対に他人を否定しない感覚は、成蹊学園で学んだからこそ身についた貴重なものだと思っています。私自身、長髪で音楽三昧の日々をおくっていましたから、一般的な学校なら浮いた存在になっていたかもしれません。けれども、成蹊の中では、体育会の生徒も、科学的なことに興味を持っているややオタク的な生徒も、少しやんちゃなリーゼントの生徒も、普通に話しかけてきます。お互いの突出した個性、独自性を認め合う環境で育ったことが、伝統に縛られず、自分なりの個性を求めて、常に新たなジャンルに挑戦し続けようとする、現在の私の活動の「原点」になっている気がします。

―今後の目標を聞かせてください。

東儀　最近、「これからの日本人は国際人にならなければならない」といった言葉をよく聞きますが、私は、国際人とは英語が話せることでも、海外の事情に精通していることでもないと考えています。重要なのは日本の文化をどれぐらい理解しているかということです。外国の人に自国の文化を語れないようでは、国際人としては通用しません。雅楽という日本文化の象徴の一つを背負っている人間として、若者たちに雅楽を通して日本文化の奥深さの一端にふれてもらえるような活動をすることが、今後の目標です。

自分が変化する可能性に挑戦しワクワクしてほしい

―最後に、成蹊学園の後輩たちにメッセージをお願いします。

東儀　おそらく皆さんは、自分の将来像について迷うことも少なくないでしょう。若い頃には、自分の可能性がどう開かれているのか、未知数な面が多いので、それも当然のことです。そんな皆さんに伝えたいのは、あまりにも遠い将来像ばかりを考えずに、まずは目の前の興味を持ったことに取り組んでほしいということです。一歩踏み出せば、次にやりたいことも見つかり、そのうちに自分なりの目標が見えてきます。もちろん、失敗することもあるでしょう。そうしたらまた、別の何かにチャレンジしてみることです。失敗したことはけっして無駄ではなく、他のジャンルの活動の中で、必ずふと思い出し、役立つことがあるのです。

五十歳を越えた私も、まだまだ軽いフットワークで、何にでも挑戦したいという意欲を失っていません。新しい分野に踏み出せば、未知の自分にまた出会えるという楽しみがあるからです。私よりも若い皆さんには、いくらでもやり直しのチャンスがあるのですから、自分に制約をかけないで、興味のあることにどんどんチャレンジしてほしい。そのなかで、未知の自分、変化していく自分にワクワクしてほしいと願っています。

（広報課）

実物主義の生物教育

―自然から学ばせてもらう精神を―

中学・高等学校

高等生物教育学・環境生態学

佐藤（さとう） 尚衛（なおえ）

中学・高等学校教諭

1973年生まれ。千葉大学教育学部卒業、東京農工大学大学院農学研究科環境資源学専攻修了。専門は環境微生物学・微生物生態学。現在、ニホンヤマビルの地理的変異と形態分類を行い、ヒル類の新しい分類手法を模索中。日本微生物生態学会・日本生態学会・日本生物教育学会会員。日本自然保護協会観察指導員。著書に『Comparative Evaluation of Environmental Toxicants』（NIRS：共著）がある。

観察・実験重視の生物教育

成蹊中学・高等学校の生物教育は旧制中学時代より実体験・実物重視の教育を実践してきています。それは生物の標本展示コーナーや充実した実験室、二名体制の生物実験助手などのハード面にもみてとれますが、個性豊かな教員による観察・実験の豊富さが何といっても特徴です。とくに高校二年生全員が行うキイロショウジョウバエの遺伝実験は五十年以上も継続され、卒業生からは「成蹊の思い出は一に凝念、二にショウジョウバエ」と言われるほど印象深いものとなっています。また、高校三年生の選択授業では、少人数教育を生かし、野外実習や博物館実習を積極的に取り入れています。昨年の野外実習では、「林苑におけるベートトラップによる歩行性昆虫の採集」や「武蔵関公園の水中微生物の観察」などを行い、博物館実習では国立科学博物館や目黒寄生虫館などを訪問しました。机上の学習にはとらわれない自然体験・観察体験重視の教育活動を推進し、自然から学ぶ精神を大切にしています。

武蔵関公園での水中微生物の採集

生物教育と生物部の活動

高校には生物科教諭が顧問を務める生物部があり、現在部員は二・三年生を含め十四名で、活発な活動を展開しています。成蹊高等学校生物部の歴史は古く、一九二八年に生物研究会として発足し、八十年以上の歴史があります。一九三八年には生物研究会会報第一号がまとめられ、その冒頭には「専門は何に向かうともこの好機を利用して自然界の機微に触れることは我々文化人に不可欠の教養の一つでもあると信ずる」との言葉が書き記されています。これは成蹊の生物教育の根底にある実物主義の考えを踏襲しており、野外観察の重要性を余すところなく伝える名文です。

また、生物部はOB・OGの方々の結束も強く、蹊祭ではOB・OG会が開催され、現役生との交流も行われていますし、桜祭ではOB・OGの方々による研究発表会も行われています。

顕微鏡による水中微生物の観察

野外活動をベースにした生物部の活動

現在、生物部では生物研究会からの流れを汲み、基本精神に三つの事項を掲げ、生徒に取り組みをさせています。

①自然と親しみ、多くの生物とかかわりをもつことで確かな自然観を養う。

月に一度、野外活動を行い、個々の研究テーマとは関係なくフィッシング・昆虫採集・バードウオッチングなど、さまざまなアプローチで自然との接点を持たせています。合宿は島嶼（とうしょ）を中心に行い、昨年は夏合宿に八丈島、春合宿に沖縄本島へ赴き活動を行いました。本土と異なる自然を間近に見ることは、自然観の育成に効果的で、身近な自然の重要さを気づかせてくれます。

沖縄・瀬底島での海岸生物採集

高尾山ムササビ観察会

②地球共生の概念を認識し、多くの生物とともに生きる楽しさを実感する。

採集してきた生物を飼育、観察し、生物の命の大切さや、ともに生きていく喜びを感じさせています。また、生物飼育は研究への一歩と考えており、生命現象の制御系実験への移行を担う上で重要な要素であると考えています。生物第二実験室は生物部の部員たちが採集してきたさまざまな生物が展示されており、ミニ水族館と化しています。水族館などでしかお目にかかれない生物も多数おり、小学生には大人気で、蹊祭では人気のスポットとなっています。

生物部が管理する人気のミニ水族館

③研究テーマをもち、学問としての生物的素養を養う。

各自研究テーマを決め、日々調査・研究を行い、学会発表を行わせています。日本生物教育学会 第八十八回全国大会 高校生ポスター発表では二人の生徒が優秀賞をもらいました。発表に向けて顧問とのディスカッションはもちろんのこと、部員たちの前での発表や蹊祭・六月展・二月展での展示発表など、多くの発表練習の機会が与えられています。したがって、自身の研究の問題点などを客観的にとらえる力が自然と身につき、このような力は大学へ進学しても研究に対する前向きな姿勢へと繋がるはずです。

生物教育学会での発表

2012年 ― 1912年
創立100周年 ― 第一話

受け継がれてきた伝統と、新しい時代に向けての挑戦。
成蹊学園の百年の歩みを、十回にわたって振り返ります。

成蹊を創立した人々

三人の運命的な出会い

成蹊学園の創立者中村春二は、一八七七（明治十）年三月三十一日、国文学者の父秋香、母静子の次男として、東京の神田猿楽町に生まれた。中村は両親の深い愛情に包まれ、幼い頃から詩文や絵画に親しんで育った。このときの慈愛に満ちた家庭環境は、後年、私塾「成蹊園」の開設に大きな影響をおよぼすことになる。

一八九〇（明治二十三）年春、高等師範学校附属学校尋常中学科に入学した中村は、そこで生涯の友となる今村繁三と岩崎小弥太に出会う。今村の父清之助は今村銀行の頭取であり、多くの鉄道会社の設立に関与し「鉄道王」と呼ばれた人物であった。一年後輩の岩崎小弥太は、三菱財閥の基礎を固めた岩崎弥之助の長男である。三人は友情を深めていき、やがてこの交流の中から、成蹊教育の源流が形成されていくのである。

三人が学んだ附属学校尋常中学科では、少人数・精鋭主義の教育が行われていた。中村らはここで、陸軍の要職にあった元会津藩士の山川浩や、講道館を設立した嘉納治五郎など、古武士的風格のある校長の薫陶を受け、質実剛健の気風をたたき込まれた。また、神田駿河台の岩崎家の学寮に集まっては、将来の夢などを語り合った。

尋常中学科を出た中村は、第一高等学校、ついで東京帝国大学へと進んだ。帝大在学中から曹洞宗第一中学林（現、世田谷学園）の講師を務め、卒業後も同校や麹町高等女学校などで教鞭をとった。第一中学林の寄宿舎では、朝五時の起床、朝夕の読経などが義務づけられ、永平寺の修行に準じる生活が採り入れられていた。中村はここで僧堂教育という日本古来の教育方法の一端にふれ、これからの教育は「真我」（心の奥底にある尊い心）の開発でなければならないと考えた。それはのちに、成蹊教育を特徴づける凝念法、心力歌、鍛錬主義教育などへと結実していく。

一方、日露戦争開戦が近づくなか、国民皆教育を目指す日本の教育現場で、教師として中村が直面したのは人間の個性を無視した画一的教育に陥っている現実だった。しかも、多くの英才が貧困によって教育の機会を奪われていた。この現状を打開するため、中村は貧窮家庭の俊才を集め、彼らを支える私塾を開設しようと考えるようになった。

学生塾「成蹊園」の設立

中村春二の夢を現実へと導いたのは、親友の今村繁三だった。今村は尋常中学科を卒業したあと渡英し、パブリックスクールを経てケンブリッジ大学に入学。一九〇二（明治三十五）年に帰国して銀行を継いでいた。「事業家は収益の一部を社会に還元すべき」と考えていた彼は、一九〇六年一月、三十歳になったのを記念して育英事業計画を公にし、中村に私塾開設の基金を提供した。中村はこれをもとに、本郷の自宅に学生塾を開いた。

同じ頃、帝大を中退してケンブリッジ大学に留学していた岩崎小弥太が帰国し、三菱合資会社の副社長に就任した。岩崎もまた英国で経験した「個性を重視した教育」に感銘を受け、自身も教育への関心を持つようになっており、中村の趣旨に賛同し基金を提供することになった。

塾は成蹊園と名付けられた。「成蹊」の二文字は『史記』李将軍列伝の「桃李不言下自成蹊」に由来するもので、中村らの理想を端的に表している。「桃や李は何も言わないが、美しい花や実を求めて人が集まり、自ずからその下に小道ができる。同じように、人格をそなえた人のもとには、その徳を慕って多くの人が集まる」という意味である。

塾生は、成績優秀だが家庭が貧しい者を選び、彼らに奨学金を与え、返済義務はないものとした。のちに貴族院書記官長などを務め勲一等を受章した瀬古保次もそんな一人で、抜群の成績でありながら、母子家庭であるために進学を断念していた。開塾第一回記念会で、瀬古は熱涙をこぼしながら、自分の道を拓いてくれたことに謝辞を述べている。

一高に進学した瀬古をはじめ、一期生から高い実績を示したことが知られ、入塾者が増えて手狭になったため、一九〇八（明治四十一）年には駒込富士前町に移転。この頃から、評判を聞いて、桂太郎首相の孫など、華族からの入塾申し込みも相次ぐ。理念と異なると困惑した中村だが、桂首相の孫の父親が日露戦争で戦死したことを知った妻・小波から「親代わりとなって面倒をみたい」と言われたことや、岩崎からの助言も得て、受け入れることにした。

順風満帆な船出に見えたが、中村には新たな悩みも生まれていた。塾生たちは中村の家族と起居をともにしながら、昼間はそれぞれの学校に通う。朝夕や休日の接触だけでは、本当の意味での人間教育を行うには限界がある。皆と一日中ふれあえる全寮制の私立学校を作りたいという思いが募っていったのである。新学校設立を決意した中村は、父から相続した私財を投げ打つとともに、岩崎、今村の賛助も得て、池袋に一万坪の土地を借りた。

そして、新校舎が落成し、いよいよ開校を間近にひかえた一九一二（明治四十五）年三月二十三日、衝撃的な事件が起きるのである。

●次回のテーマは「実務学校の開校」です。

（企画・監修　創立一〇〇周年記念行事推進室）

今村　繁三（1877～1956年）

25歳の若さで父が興した今村銀行を継承。常々社会事業の必要性を考えていた繁三は「成蹊園」開塾当初から、春二の教育事業を支援し続けた。

岩崎　小弥太（1879～1945年）

三菱4代目社長。英国留学中に個性を重視した教育に感銘を受ける。春二の理想に共鳴し、これを援助。理事長に就任するなど、学園の経営基盤を終生支え続けた。

中村　春二（1877～1924年）

学園の創立者。独自の人間教育を目指し、のちに「大正自由教育」と呼ばれる運動の中で先駆者として活躍した。（写真は30歳、成蹊園開塾当時）

旅行好きであった中村が友人に宛て、旅先から送った自筆スケッチ入りの葉書

上：生徒の作文帳にのこる中村の添削
下：教員時代は国語や唱歌を教えるだけでなく、テニスや野球など新しいスポーツのクラブの部長などをつとめた。手前は成蹊園開塾当時の塾生と中村の家族

成蹊学園創立100周年記念事業特集

part 01

情報図書館

新たな出会い、交流が生まれる「知の拠点」

二〇〇六年の開館以来、利用率が飛躍的にアップしている「情報図書館」。情報リテラシー教育の充実や、グループ単位の利用の促進など、新しい試みも数多く、「知の拠点」として進化を続けています。

▲蔵書の検索法などの情報リテラシーに関するガイダンス

これまでのイメージをくつがえす〝静〟から〝動〟的な図書館へ

「就職活動の際に、情報収集のために新聞数紙をチェックしたほか、レポート用の資料検索、テスト前の自習など、ほぼ毎日のように情報図書館に立ち寄るのが習慣になっていました」。

こう語るのは、「情報図書館のヘビーユーザー」を自認する小林由季さん（二〇一〇年三月経済経営学科卒業）。特に、小林さんのお気に入りの場所になっているのが、二百六十六室もあるクリスタルキャレル（個室閲覧室）とメディアルームです。

「クリスタルキャレルは全席に情報コンセントが配備されており、インターネットで情報を検索しながら勉強することができます。夜九時まで開館しているので、私は放課後もよく利用しています。自分だけの空間といった感じで、集中できますね。また、映画が大好きなので、メディアルームでは、話題の映画や、黒澤明監督作品などを楽しんでいます」。

▲開架図書の周囲に配置されたクリスタルキャレル

また、プラネット（グループ閲覧室）を設置したことによって、以前と比較して、グループ単位で利用する学生が増加していることも大きな特徴です。

「プラネット内は学習会話がOKになっているので、図書館の資料を用いる授業のほか、テスト前などに学生たちが自主的な勉強会を開いたり、ホワイトボードを使ってゼミのプレゼンテーションの練習をしたりなど、さまざまに活用されています。従来の図書館には〝静〟のイメージしかなかったと思いますが、プラネットで真剣な議論が展開されることで、〝動〟的な交流も生まれています」（図書館司書・西田）。

▲アトリウムの中空に浮かぶプラネット

使い勝手抜群の図書館 情報リテラシー教育が充実

情報図書館は使い勝手の良さにも特色があります。

「蔵書数だけでいえば、もっと多い大学もあるでしょうが、そのほとんどはキャンパスが分散しており、目的の本がすぐに入手できるとは限らないのが実情です。その点、本学はワンキャンパスの利点を生かして、すべての蔵書が一カ所に集中しています。しかも、開架図書だけで約五十五万冊におよぶ蔵書を、近接分野が並ぶように整理・配架しています。目的の本だけではなく、近くに並べられている本にも目を向けると、予想外の出会いや発見が生まれ、さまざまな知的好奇心を広げていくこともできます」（西田）。

充実した蔵書を学生たちにフル活用してもらうために、情報リテラシー教育にも力を入れています。

「情報リテラシーとは、多様な情報源の中から自分が必要とする情報にアクセスし、評価し、利用する能力のことです。情報図書館では、ゼミ単位を中心に、要望に応じて指導教授や図書館司書による蔵書検索法のガイダンスを設けています。情報図書館が所蔵している書籍や雑誌をはじめ、国内外の論文や書籍、新聞記事をパソコンでスピーディーに検索する方法を習得し、レポートや卒論作成に不可欠な情報リテラシーを高めることができます」（図書館司書・縁山）。

同窓生や市民などにも広く開放 多読コーナーの充実も特色

ところで、情報図書館は学生、教職員だけでなく、同窓生や市民などにも開放されています。二〇〇九年度は同窓生百七十九名、市民四十四名が年間利用登録をしているほか、一日閲覧許可証も発行しています。

二〇〇八年三月まで本学の非常勤講師として教壇に立たれていた森松健介さん（中央大学名誉教授）もその一人で、現在も毎日のように通っていらっしゃいます。

「情報図書館を利用するようになって四年弱になりますが、それまで専門にしていなかった作家にも着目するようになり、この間、二冊の単著、四冊の共著、雑誌論文六点などを仕上げることができました。近くトマス・ハーディの単訳書も刊行予定です。これも情報図書館のおかげだと感謝しています。この図書館で特に学生に活用してほしいのは、一階南のフロアです。授業で使うテキスト・参考書が学部別に並んでいるほか、新書・文庫、国内外の新聞や雑誌なども精選されており、教養が高められるように配慮されていると感じます。また、英語の多読用テキストのコーナーもあります。最近の学生は、日常会話力は向上していますが、文法力、読解力が低下している感があります。大学の学びにおいては、学部を問わず、英文の論文を読むことが必須であり、読解力を高めることが不可欠になります。それには多読が有効ですから、ぜひチャレンジしてほしいですね」。

多読とは、やさしい英語で書かれた絵本や、薄いペーパーバックから始めて、自分のレベルにあった本を、自分のペースで楽しみながら読み進めていく学習法。自然に英語のリズムが身につき、読解力が高まる効果的な学習法として、近年、注目を集めています。情報図書館には、この多読用のテキストが約六千冊もまとめて配架されています。これだけ充実しているのは、全国の大学図書館の中でも極めて珍しいケースです。国際教育センターでも、全国初の多読専用教室を設けるなど、「多読教育プログラム」を推進しているので、今後、利用が活発化することが期待されます。

このように、さまざまな出会いと発見にあふれていることから、情報図書館の利用者数は大幅に増加しています。とくに学生の入館者数は、開館前の二〇〇五年度の三十二万五千二十二名から、二〇〇八年度には五十九万六千二百二十四名と、ほぼ倍増しています。蔵書数もすでに百万冊を突破し、二〇〇八年度末現在で百八万二千五百九冊にのぼっています。

さらに、『二〇一〇年大学ランキング』（朝日新聞社）の「大学図書館ランキング」（学生一人あたりの蔵書数、受け入れ図書数、貸出数、図書館費をもとに総合評価）では九位にランクされており（資料①）、社会からも高く評価されています。

（企画・監修 創立一〇〇周年記念行事推進室）

▲スピーディーに自動搬送するシステムが導入されている自動書庫

▲2008年度のグッドデザイン賞を受賞した斬新なデザイン

資料① 大学図書館ランキング 総合（学生1人あたりの数値）

位	大学	蔵書	受け入れ	貸し出し	図書館費	指数評価
1	国立音楽大	24.1	7.2	100.0	78.2	100.0
2	天理大	100.0	17.4	5.7	61.1	87.9
3	国際基督教大	37.6	14.0	63.5	67.1	87.0
4	一橋大	64.9	16.0	21.4	65.2	80.0
5	東京大	51.6	20.5	15.5	79.8	79.9
6	鶴見大	36.4	21.2	7.7	91.9	75.0
7	学習院大	30.7	12.3	12.8	97.3	73.1
8	大阪府立大	29.3	100.0	11.8	－	67.4
9	成蹊大	22.3	27.3	17.4	73.0	66.8
10	京都大	47.0	10.6	19.4	62.1	66.4
11	北海道大	34.7	13.0	16.0	73.2	65.3
12	大阪市立大	45.1	10.6	11.0	68.3	64.4
13	九州大	35.9	10.9	11.8	70.2	61.5
14	東北大	36.1	10.9	13.1	67.8	61.1
15	慶應義塾大	22.4	5.8	17.3	82.0	60.9

朝日新聞出版『大学ランキング2010』より

この人たちにインタビューしました

「充実している多読用テキストを活用してほしい」と語る森松 健介さん

クリスタルキャレル（個室閲覧室）をよく利用するという小林由季さん

大学の近況

成蹊教養カリキュラム始まる

二〇一〇年四月から全学共通科目として「成蹊教養カリキュラム」が開始されます。成蹊教養カリキュラムの原型は二〇〇四年に栗田恵輔前学長が提示した「全学支援科目」という構想ですが、それが全学共通の教養教育の構築というコンセプトに成長し、約五年の歳月をかけて開設の準備が続けられました。全学教育委員会や各科目部会など、学部横断で延べ五十名以上の教員がかかわった成蹊大学開設以来の大規模なプロジェクトであったと言っても過言ではありません。

成蹊教養カリキュラムは、人間形成系統と文化創造系統に分かれ、それぞれがさらに社会性の育成と国際性の育成の二つのカテゴリーに分かれるという2×2（ツーバイツー）の構造を持っています。また、より基礎的な科目を明確化し学生が履修し易くなるように、ほとんどの科目群にコア科目と発展科目を設けています。

成蹊教養カリキュラムには成蹊教育の特徴を明確にするために「桃李成蹊科目」という特別な科目群が設けられています。その中でも、伝統的な少人数教育の重要性を内外ともに発信するために、コア科目として「基礎演習」という少人数のゼミナールが全学部一年次必修科目として配置されています。

また成蹊教養カリキュラムでは英語重視の特徴が明確に打ち出されています。学部に関係なく全ての学生が英語のコア科目を八単位必修で履修することになっています。

成蹊教養カリキュラムには、二十一世紀を生き抜いていくために、成蹊大学を卒業するすべての学生が身につけることが望ましいと考えられる教養のスタンダードが示されています。

成蹊教養カリキュラムの構造と特色

桃李成蹊科目		成蹊の特色
日本語力科目 キャリア教育科目 情報基盤科目 健康・スポーツ科目	総合文化科目 ●人間と文化 ●社会と文化 ●科学技術と文化	社会性の育成
英語科目	国際理解科目 ●初修外国語・異文化理解 ●国際教養 ●実践国際理解	国際性の育成
人間形成系統	文化創造系統	

前期公開講座のご案内

本学では、年二回公開講座を開催しています。今年度前期は、昨年度後期に続き、同一テーマ「教養の扉」を開催いたします。

前期公開講座テーマ「教養の扉」

第一回　五月十五日（土）
北川 浩 経済学部教授「学校システムと教養教育」

第二回　五月二十九日（土）
伊藤 郁夫 理工学部教授
「科学的に考える―熱と光の科学」

第三回　六月五日（土）
山田 崇人 法学部教授「英国民に愛される詩」

第四回　六月十二日（土）
木谷 眞理子 文学部准教授
「源氏物語の表現―物語にとって場面とは何か」

時間は各回とも十三時三十分から十五時三十分までです。会場は、大学八号館一〇一室となります。詳細につきましては、左記ホームページでご確認ください。
《URL》 http://www.seikei.ac.jp

協定留学生修了式

二月二日、本学国際交流会館にて二〇〇九年度後期協定留学生五名の修了式が行われました。式当日は、前日に降った雪が残る肌寒い日となりましたが、会場には学生アドバイザーとして協定留学生をサポートしてきた日本人学生をはじめ、多数の学生が参加しました。式では、修了証の授与とともに、協定留学生一人ひとりが留学生活や、日本での思い出についてスピーチを行いました。日本人学生と協定留学生たちの充実した日々をうかがい知ることのできる修了式となりました。

二〇〇九年度　国家試験合格実績

各種国家試験の合格実績は、次のとおりです。

●司法試験 十四名
●国家公務員試験 在学生九名

※二〇一〇年二月末現在キャリア支援センター届出分

2010年度　学年暦

行　事	大　学	法科大学院
入学式	4月3日（土）	4月3日（土）
オリエンテーション	3月29日（月） ～4月8日（木）	4月3日（土）
健康診断	4月1日（木） ～7日（水）	
前期授業開始	4月9日（金）	4月5日（月）
前期祝日授業日	4月29日（木） 7月19日（月）	4月29日（木）
学内陸上競技大会	5月28日（金）	
学内競漕大会（レガッタ）	6月24日（木）	
火曜日振替授業日	5月8日（土）	
水曜日振替授業日	5月22日（土）	
木曜日振替授業日	6月26日（土）	
補講日	7月3日（土） 10日（土） 17日（土）	7月19日（月） ～24日（土）
最終授業週	7月20日（火） ～26日（月）	
前期授業終了	7月26日（月）	
学期末試験期間	7月27日（火） ～8月3日（火）	7月26日（月） ～8月7日（土）
夏期休業期間	8月4日（水） ～9月20日（月）	8月8日（日） ～9月23日（木）
夏期集中講義期間	9月6日（月） ～9月10日（金）	

行　事	大　学	法科大学院
学位授与式	9月25日（土）	9月25日（土）
後期授業開始	9月21日（火）	9月24日（金）
四大学運動競技大会 （於：学習院大）	10月15日（金） ～17日（日）	
棹祭期間	11月19日（金） ～22日（月）	
後期祝日授業日	10月11日（月） 12月23日（木）	10月11日（月） 11月3日（水） 11月23日（火） 12月23日（木） 1月10日（月）
補講日	12月11日（土） 18日（土） 1月8日（土）	1月20日（木） ～26日（水）
冬期休業期間	12月25日（土） ～1月6日（木）	12月24日（金） ～1月6日（木）
月曜日振替授業日	11月13日（土）	
後期授業再開	1月7日（金）	1月7日（金）
最終授業週	1月18日（火） ～24日（月）	
後期授業終了	1月24日（月）	1月19日（水）
学期末試験期間	1月25日（火） ～31日（月）	1月27日（木） ～2月9日（水）
春期休業期間	2月1日（火）～	2月10日（木）～
学位授与式	3月19日（土）	3月19日（土）

成蹊大学賞　表彰式

本学では、学術、芸術、スポーツ、文化活動、社会活動・環境学術活動の各分野で他の学生の範となる活動を行い、優秀な成果をあげた個人および団体に日ごろの努力を称え、「成蹊大学賞」を授与しています。

二〇〇九年度は二十三件の応募があり、厳正なる審査の結果、左記の方々が受賞されました（受賞者の学年は受賞時の学年です）。

表彰式は、十二月十五日、本館大講堂において行われ、学長より賞状と副賞として金一封が贈られました。

『ノートテイク』講座開催

二月二十四日、「ノートテイク」講座が大学八号館一〇一教室にて行われました。

「ノートテイク」とは、授業時間に聴覚が不自由な学生を中央にして、左右に二人一組で座り、手書きのノートなどを通じて情報を伝える方法で、授業内容だけでなく、雑談なども含めた場の共有までも支援します。これは、聴覚障害学生に対する情報保障の手段の一つです。

当日は、十六名の学生が参加し、ノートテイクについて学びました。成蹊大学では、昨年から学生によるノートテイクの取り組みがスタートしており、本年度もこの講座を受講した学生が実際にノートテイカーとして支援に協力します。

父母懇談会開催予定のお知らせ

日　程：6月12日（土）
対　象：経済学部※2・3年次生保証人
　　理工学部　3年次生保証人
　　文学部　　3年次生保証人
　　法学部※　2・3年次生保証人

※ 経済学部・法学部につきましては、本年度に限り3年次生保証人も対象とします。

5月に入りましたら、開催日程などの詳しいご案内状と出欠葉書をお送りいたします。ご参加をお待ちしております。

2009年度　成蹊大学賞・特別奨励賞　受賞者一覧

●成蹊大学賞

部　門	団体名・個人名	表彰理由
スポーツ部門	金澤　翔太 （体育会ラクロス部男子）	日本代表強化選手選抜メンバーとして韓国大会に出場し大学の部で2位になり、個人としてMVPに選出された。またオーストラリア大会にも参加したことを評価した。
	木村　龍志 （体育会ラクロス部男子）	日本代表強化選手選抜メンバーとして韓国大会に出場し大学の部で2位になった。また日本での国際親善試合に参加したことも評価した。
	田中　智之 （体育会ライフセービング部）	学生日本一を決める大会でのサーフスキーレース男子種目で1位になり、クラブチーム単位での国内最高峰の大会でのオーシャンマン種目に参加し第7位になったことを評価した。
文化活動部門	文化会英語会＜グループ表彰＞ 佐藤　真央理 中田　育	大学院生を含む学生日本一を決める2大会でともに1位になったことを評価した。

●特別奨励賞

部　門	団体名・個人名	表彰理由
学術部門	情報分析プログラム＜グループ表彰＞ 泉　万優子 久保田　衣里子 種村　彩未 田村　和也 （経済学部経済経営学科3年）	第57回東京都統計グラフコンクールに参加しパソコン統計グラフの部で1位の都知事賞を受賞し、統計グラフ全国コンクールに参加し入賞したことを評価した。
	岡野　いつ佳 （経済学部経済経営学科3年）	第1回懸賞統計論文応募で優秀賞を受賞したことを評価した。
	中田　育 （法学部政治学科3年）	The 1st Model Asian Unionで最優秀賞を受賞したことを評価した。
	小俣　彰久 （理工学部エレクトロメカニクス学科4年）	ヤングエンジニアポスターコンペティションで「YPC優秀発表賞」を受賞したことを評価した。
スポーツ部門	武藤　裕美 （体育会ライフセービング部）	学生日本一を決める大会でのビーチラン種目で5位となったことを評価した。
	宍野　彰香 （体育会ライフセービング部）	学生日本一を決める大会でのボートレスキュー種目で5位となったことを評価した。
文化部門	高島　健尚 （経済学部経済経営学科3年）	天野杯全日本学生英語弁論大会と、KESS杯で1位になったことを評価した。
環境学術部門	ダッブスイ　オルファ （工学研究科応用化学専攻 博士後期課程2年）	16th Asian Symposium on Ecotechnologyで、「Excellent Poster Award」グッド賞を受賞したことを評価した。
	平野　研人 （工学研究科電気電子工学専攻 博士前期課程2年）	情報通信分野での代表的な国際学会でBest Paper Award賞を受賞し、国際学会雑誌に論文掲載された。また武蔵野市と姉妹都市であるルーマニアのブラショフ市との交流促進に貢献したことを評価した。

※受賞者の学年は受賞時のものです

2009年度　国際研究賞

部　門	団体名・個人名	表彰論文
国際研究賞	大坂　歩 （文学部国際文化学科・2009年3月卒業生）	「成蹊カウラ間の留学生交換計画 ―日豪和解に込められた思いから―」

中学・高等学校の近況

入学試験

二〇一〇年度入学生のための入学試験は、一月八日の中学国際学級入試・中二帰国生編入試を皮切りに、二回の中学入試、高校入試、高校帰国生入試の順で実施されました。二回入試の三年目を迎えた中学校では、受験生の負担軽減を図るため今年から試験時間を短縮し、受験生面接を廃止しました。

新型インフルエンザは冬に入ってすっかり下火になり、今年の各入試では健康上の理由で別室での受験をするケースがゼロという順調な入試を実施することができ、胸をなで下ろしています。

少子化継続のなか、都内で公立中高一貫校の相次ぐ無償化の実施等の影響は私学全般におよんでおり、成蹊中学・高等学校もその魅力を一層アピールしていくことが求められています。

冬の各種行事

十二月に行われている中学校スキー教室は、新型インフルエンザ流行が懸念され、万一発生した際の対応に配慮して今回やむを得ず中止としました。

二月に毎年行われている中学健歩会、高校マラソン大会は降雪などでコンディション不良のため今年度は残念ながら実施を見送りました。

そのようななか、高校フィレンツェ学習旅行が四年ぶりに復活、一月四日から八日まで、高校二年生の希望者三十五名がルネサンスの古都、フィレンツェに行きました。実質二日間の現地滞在で自らの足で教会、美術館などを訪ね、教科書や美術書に載っている芸術作品の本物を目の前に感銘を受け、心に残る旅になりました。

参加した生徒の感想を次に掲載します。

今回、私は学習旅行で三泊五日のフィレンツェ旅行へ行き、たくさんの思い出を作ることができた。友達との自由行動の時間は楽しくて、三泊では全然足りないということがすぐに分かった。特に楽しかったのは、中央市場を雨の中歩き回ったことだ。イタリア人の店員さんが、すごくフレンドリーに話しかけてくれた。雨の中、傘をささずにフードをかぶり、「寒い寒い！」と震えながらジェラートを食べ歩きしたのも本当に楽しかった。

美術館や教会や宮殿、さまざまなところを見てまわったが、とくに感動したことは、「ヴィーナスの誕生」や「春」、ダヴィデ像など写真でしか見たことのなかった作品を見ることができたということだ。細かな解説も聞けたことで今までまったく知らなかったことを学ぶことができ、見るだけではなく、絵に込められた意図などをくわしく学びたいと思うようになった。

見学した中でとくに心に残った所は、ピッティ宮殿の天井とドゥオーモのクーポラから見たフィレンツェの街並みの景色だ。ピッティ宮殿の天井は遠くから見ると本物の石像にしか見えないが、良く見るとほとんどが描かれていて一部だけ石像という造りになっていた。これには本当に感動して、ずっと天井を見て歩いていた。クーポラからの景色はすばらしく、がんばって長い階段を上ったかいがあった。

フィレンツェに行き、いろいろ学べたなと思えたことは、みんなとふざけながら話している時にも、「受胎告知」や「ピエタ」という言葉が普通に出てくるようになったことだ。最終日の夜は寝るのが惜しく、みんなといろいろ長々と語り合った。

毎日が充実していて、冬休みの最後にこんなに最高の思い出ができて本当に良かった。今年、この企画が成立し参加できたことはラッキーだったと心から思った。

（二年　白石萌々奈）

運動部・文化部の活躍

●中学スキー部

第47回全国中学校スキー大会東京都予選（兼 第22回東京都中学校スキー大会）

〈大回転〉大高裕生（3年）　5位入賞

●中学硬式庭球部

〈男子団体〉関東中学校新人テニス選手権大会　ベスト8

〈女子団体〉関東中学校新人テニス選手権大会　ベスト8

●第30回全国中学スケート大会 フィギュアスケート競技

〈女子Aクラス〉庄司理紗（1年）　6位

●中学吹奏楽部

東京都アンサンブルコンテスト（都大会）木管八重奏　銅賞

川本祥子（Pic）　遠藤海和（Fl）　若穂囲直子（Ob）、

渡邉紘子（Cl）　三木永貴（Cl）　小林杏菜（A.Sax）、

依田秀実（T.Sax）　後藤生帆（B.Sax）

●第63回 全国かるた競技 東京東会大会

〈C級〉吉岡晃子（中学3年）　準優勝

●高校スキー部

第59回全国高等学校スキー大会東京都予選

（兼 第46回関東高等学校スキー大会東京都予選）

〈女子回転〉白簇あず沙（2年）　19位（関東大会 出場権獲得）

〈女子大回転〉白簇あず沙（2年）　8位

（関東大会および 全国大会（インターハイ）出場権獲得）

第46回関東高等学校スキー大会

〈女子回転〉白簇あず沙（2年）　出場

〈女子大回転〉白簇あず沙（2年）　出場

平成21年度全国高等学校総合体育大会（兼 第59回全国高等学校スキー大会）

〈女子大回転〉白簇あず沙（2年）　出場

なお、上記大会の結果（108位）等から東京都スキー連盟から「強化指定選手」に選ばれました。

●高校硬式庭球部

〈男子団体〉東京都高等学校選抜テニス大会　4位

〈女子団体〉東京都高等学校選抜テニス大会　4位

●高校剣道部

〈男子団体〉都大会新人戦　出場

●第25回関東地区高等学校囲碁選手権大会

〈19路盤女子個人戦〉筒井桃子（2年）　3位

●引率からひとこと

フィレンツェではクリスマスをくくる一月六日のエピファニア（主顕祭）の祝祭気分あふれる街中を次の順で歩きました。

ウフィッツィ美術館、ヴェッキオ宮殿、中央市場、サンタ＝マリア＝ノヴェッラ教会、ドゥオーモとクーポラ、リッカルディ宮殿（以上一月五日）、アカデミア美術館、サン＝マルコ美術館、孤児養育院、メディチ家礼拝堂、サンタ＝ロレンツォ教会、ラウレンツィアーナ図書館、ピッティ宮殿、パラティーナ美術館、サンタ＝クローチェ教会（以上六日）。

小学校の近況

春を待ちわびた「新二年生」

二〇〇九年度入学の一年生は、成蹊小学校の一年間を満喫し、いよいよ新一年生を迎える「上級生」となりました。昨秋以降の一年生の行事の中から、新しい春を待ち望んできた子どもたちの活動をお知らせします。「新二年生」は、こうした楽しい学習の数々を、嬉々として新入生の仲間に伝えていくことでしょう。

●子どもたちの観察の眼を育てる園芸教育

「こみち」科は、一年生から六年生まで継続する成蹊の特色ある教科の一つです。

その中でも園芸教育は、一年生のハツカダイコンをスタートに、二年生のハクサイ、三年生のツルアリインゲンなどの栽培体験を経て、五年生で播種した小麦を六年生で収穫するまで、各学年が年間を通して多様な栽培に取り組む「こみち」科の主要な体験学習となっています。

一年生は、二学期にはアオクビダイコンの栽培に挑戦しました。十月の半ばに間引きしたアオクビダイコンも、単に手にとって眺めるだけでなく、生育の様子を丹念に観察し、それを見たまま・感じたままに表現する学習へと拡げていきます。

十二月の初めには、葉をいっぱいにひろげた大きなアオクビダイコンを収穫し、子どもたちは大満足でした。

●成蹊ならでは…松林での「やきいも大会」

小学校は、学園内の落葉を合図に「やきいも大会」の季節となります。今年も、子どもたちが熱心に欅の落ち葉を集め、小学校の西側にある松林での「やきいも大会」を楽しみました。

たなびく煙で学内や近隣の方々にご迷惑をおかけする申し訳ない行事ですが、この「やきいも大会」も、子どもたちが成蹊の自然の恵みを実感できる貴重な環境教材となっています。

十一月二十五日の一年やきいも大会では、保護者の方々も応援に駆けつけてくださいました。

●「けやきグラウンド」でのマラソン大会

これもまた恒例の鍛錬行事であるマラソン大会は、一月二十五日の一年生マラソン大会を先頭にして全学年が無事に実施しました。

マラソン大会に先立っての早朝練習も盛んです。朝八時頃には、厳寒をものともせず多くの子どもたちが半袖短パンの校内着で学園周回コース（九百七十メートル）を元気に走る姿が見られました。

中学年（千五百メートル）・高学年（二千メートル）のマラソン大会は、小学校をスタートしてけやき並木を通り、学園正門から桜並木に戻る周回コースですが、低学年（千メートル）のマラソン大会は、新装の「けやきグラウンド」の四百メートルトラックを二周半するコースで行われました。

一年生の子どもたちは、多くの保護者の皆さまの声援を受けながら、新しいトラックを元気に走り通しました。真新しい人工芝のフィールドで仲間を応援する子どもたちの姿も清々しい晴天下での一年生マラソン大会でした。

東京都児童生徒発明くふう展

子どもたちが「発明工夫」と呼んでいる製作の学習は、三年生以上の理科学習の年間カリキュラムの中に位置づけられています。二〇〇九年度も子どもたちの作品を第五十三回東京都児童生徒発明くふう展に出品し、五年連続となる「学校賞」をはじめとした多くの賞をいただきました。今回の受賞は左記の通りです。

〈特別賞〉・東京商工会議所会頭賞（三年女子）

〈優秀賞〉（四年男子・四年男子・六年男子）

〈入　選〉（三年男子・四年男子・六年女子）

なお、特別賞作品は、第六十八回全日本学生児童発明くふう展に推薦出展されました。

第九十四回卒業式

三月十七日に第九十四回卒業式が行われました。

卒業証書の通し番号一〇〇〇一番から始まる百二十五名の卒業生が巣立ちました。小学校創立以来の一万人の先輩に続いて、輝かしい未来を逞しく切り拓いていってほしいと願っています。

2010年度 事業計画・予算の概要

2010年度予算は、理事会、評議員会の議を経て、第1表および第2表のとおり決定いたしました。

学園では、2012年の創立100周年に向けて記念事業を進めてきましたが、2009年度までで建築計画が無事一段落いたしました。2010年度からは、いよいよ創立100周年記念行事が開始されます。そのための資金の積上げも実施いたします。

今後も少子化による学校間競争はますます激しくなり、私立学校の経営環境は一層厳しさを増していきます。2010年度の収支状況は改善される見込みですが、過去に積みあがった支出超過額を漸減させるため、また、設備投資のための十分な原資をそなえるための不断の努力が必要となります。

第1表の消費収支予算書は、消費収入と消費支出の均衡の状態とその内容を明らかにすることにより、学園の経営状況を把握するものです。

消費収入の部では、納付金が前年度より1億39百万円減少する見込みですが、これは新入生の納付金について、前年度は実入学者数により補正予算を編成したことによるためです。その他、手数料、寄付金、補助金などの実質的収入である帰属収入の合計は149億5百万円となり、昨年度より4億19百万円減少しています。

基本金組入額は学校運営のために基本的に必要とする建物、機器備品、図書などの取得額（第1号）、成蹊学園創立100周年記念事業募金から積上げる三菱留学生奨学基金（第3号）で、その合計額は10億68百万円となります。帰属収入から、この基本金組入額を控除した額が消費に充てられる消費収入で、その額は138億37百万円となります。一方、消費支出の部では、人件費、教育研究・管理経費などの消費支出合計は137億34百万円となります。

この結果、消費収入合計と消費支出合計の差額1億3百万円が消費収入超過額となる見込みです。

第2表の資金収支予算書は、教育研究など学園全体の諸活動に伴う資金の動きが全て網羅されており、予算総額は265億92百万円です。収入の部のその他の収入は、退職金の支払資金および施設の建設や改修の支払資金などに充当するため、過年度に積上げていた資金の取崩し額です。一方、支出の部の資産運用支出は、第3号基本金引当資産（三菱留学生奨学基金）や施設拡充引当特定資産など、計画に基づく資金の積上げです。

2010年度における学園創立100周年記念事業など主な事業計画は次のとおりです。

●国際教育センター

大学では、2010年度入学生から開始される成蹊教養カリキュラムにおいて、総合的に英語力を強化するプログラム「ASSET-Program（All Seikei Students' English Training Program）」を構築しました。その中で、学生自身で常に英語力をチェックし英語学習の一助にすべく、1・2年次全員を対象とした英語テスト（入学時、1年次末の2回はTOEIC-IP、2年次末はTOEFL-ITP）を実施します。そのうち入学時実施分の予算を、学園創立100周年記念事業に対していただいた寄付金から支出いたします。

小学校においては、小学校Read Aloud Workshopを2013年までの5年計画で実施しています。Read Aloud文庫の充実も図ることとし、各学年のワークスペースに絵本を設置し多読教育の基礎を築きます。また、確かな英語コミュニケーション能力の育成を目指し、6年生に児童英語検定を受検する機会を与えることにより、英語教育の検証を行います。なお、これらの予算も大学と同様学園創立100周年記念事業に対していただいた寄付金から支出いたします。

中学・高等学校では、イギリスのケンブリッジ大学ペンブルックカレッジへの短期留学プログラムを実施します。オーストラリアのカウラ高校からは短期留学生の受け入れを予定しています。

●学園環境の整備

ケヤキ並木の整備

成蹊学園が池袋から吉祥寺に移転してきたときに、教職員・生徒が植樹したケヤキ並木の樹勢維持ならびに安全対策のための点検・整枝を行います。

箱根寮の整備

2009年度に引き続き箱根寮の敷地を整備いたします。2009年度に旧箱根寮の宿舎跡地の東側広場に設置したバーベキューコーナーは利用者の好評を得ていますが、屋根がなく雨天時の利用ができなかったため、利用を可能にするため屋根を設置します。また、寮からバーベキューコーナーへ至る園路にシャクナゲを植樹いたします。他に、小学校の自然教育と連携を図るため芦ノ湖際の法面の植林整備などを実施いたします。

●奨学基金の拡充

2006年度から、優れた成果を期待できる留学生に対する奨学金支給を目的として三菱留学生奨学金制度を新たに設けました。過去4年間で4億円を第3号基本金に組み入れましたが、2010年度も1億円を組み入れます。

●学園施設再整備

サッカー場とハンドボールコートは2000年に人工芝を敷設しました。その水はけの良さなどから雨天明けでも支障なく授業やクラブ活動に利用できることにより、稼働率が大きく上がりましたが、交換を必要とする状況となったため張替えを実施いたします。また、中高第1体育館について、耐震補強工事を主とした改修を実施いたします。

●学生指導・支援体制の整備

大学3・8・9号館の視聴覚教室に設置している視聴覚設備、ならびに大学西1号館に設置している録画・配信用情報機器・視聴覚機器について入れ替えを行います。中学・高等学校では、理科館の化学実験室などで使用している実験台の入れ替えと給排水設備の改修を行います。小学校では、日々の教育活動や学習活動の教材化などで使用しているスタジオ・テレビ放送設備を更新いたします。他には、バリアフリー推進のため大学3号館の西側入口と大学4号館の東側入口に自動ドアを設置します。

●環境保全活動の推進

成蹊学園では、2008年10月にISO14001の認証を取得いたしました。2010年度も引き続きPDCAサイクルにより、さらなる環境マネジメントシステムに基づく環境保全活動を推進します。

第1表【消費収支予算書】（要約）

2010（平成22）年4月1日から2011（平成23）年3月31日まで　（単位：百万円）

消費収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
学生生徒等納付金	11,444	11,583	△ 139
手数料	720	716	4
寄付金	387	417	△ 30
補助金	1,487	1,518	△ 31
（国庫補助金）	(778)	(800)	(△ 22)
（地方公共団体補助金）	(706)	(714)	(△ 8)
（その他補助金）	(3)	(4)	(△ 1)
資産運用収入	397	393	4
事業収入	213	198	15
雑収入	257	499	△ 242
帰属収入合計	14,905	15,324	△ 419
基本金組入額合計	△ 1,068	△ 981	△ 87
消費収入の部合計	13,837	14,343	△ 506

消費支出の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
人件費	8,099	8,260	△ 161
教育研究経費	4,426	4,656	△ 230
管理経費	942	919	23
借入金等利息	3	31	△ 28
資産処分差額	15	521	△ 506
徴収不能引当金繰入額	19	19	0
〔予備費〕	230	230	0
消費支出の部合計	13,734	14,636	△ 902
当年度消費収支差額	103	△ 293	
前年度繰越消費収支差額	△ 3,409	△ 3,116	
次年度繰越消費収支差額	△ 3,306	△ 3,409	

第2表【資金収支予算書】（要約）

2010（平成22）年4月1日から2011（平成23）年3月31日まで　（単位：百万円）

収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
学生生徒等納付金収入	11,444	11,583	△ 139
手数料収入	720	716	4
寄付金収入	387	417	△ 30
補助金収入	1,487	1,518	△ 31
（国庫補助金収入）	(778)	(800)	(△ 22)
（地方公共団体補助金収入）	(706)	(714)	(△ 8)
（その他補助金収入）	(3)	(4)	(△ 1)
資産運用収入	397	393	4
資産売却収入	1,200	800	400
事業収入	213	198	15
雑収入	257	499	△ 242
借入金等収入	0	500	△ 500
前受金収入	2,157	2,170	△ 13
その他の収入	1,598	3,130	△ 1,532
資金収入調整勘定	△ 2,446	△ 2,986	540
前年度繰越支払資金	9,178	10,524	△ 1,346
収入の部合計	26,592	29,462	△ 2,870

支出の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
人件費支出	8,217	8,675	△ 458
教育研究経費支出	2,531	2,652	△ 121
管理経費支出	778	743	35
借入金等利息支出	3	31	△ 28
借入金等返済支出	0	688	△ 688
施設関係支出	606	1,101	△ 495
設備関係支出	403	437	△ 34
資産運用支出	5,460	5,303	157
その他の支出	623	846	△ 223
〔予備費〕	350	350	0
資金支出調整勘定	△ 609	△ 542	△ 67
次年度繰越支払資金	8,230	9,178	△ 948
支出の部合計	26,592	29,462	△ 2,870

パソコン・携帯電話からのクレジットカード決済のご案内

パソコン・携帯電話からのお申し込みによるクレジットカード決済で、
寄付をしていただくことができます。
簡単にお手続きできますので、ぜひご利用ください。

〈パソコンをご利用の場合〉

1 成蹊学園トップページ http://www.seikei.ac.jp を開き、画面右上にある「100周年記念事業」をクリックしてください。

2 100周年記念事業ページの左下にある「パソコン・携帯電話からの募金のお申し込みはこちら」をクリックしてください。

以降は画面表示に従って、手続きをお進めください。
決済が完了すると、申込完了メールが届きます。

〈携帯電話をご利用の場合〉

※ご利用いただけるのは、i-mode、EZweb、Yahoo!ケータイに対応した機種となります。

1 上の二次元バーコードを読み取り、空メールを送信してください。読み取れない場合は bokin@sk.seikei.ac.jp に、直接空メールを送信してください。

2 数秒後にURLが記載されたメールが返信されますので、そのURLにアクセスしてください。

3 「成蹊学園募金モバイルサイト」が表示されますので、お手続きください。

以降は画面表示に従って、手続きをお進めください。
決済が完了すると、申込完了メールが届きます。

【ご利用にあたって】

- クレジットカード決済は、個人の方のみご利用いただけます。（法人・団体でのご寄付をご希望の場合は、誠にお手数ですが募金局までお問い合わせください）
- ご寄付者名とカード名義人は同一であることが必要です。
- ご利用いただけるカードは、DC カード・VISA カード・マスターカードです。

【お問い合わせ先】

成蹊学園
創立100周年記念事業募金局
電話：0422-37-3941
e-mail：fund@jim.seikei.ac.jp

二〇一〇年度 入学試験結果

●大学

2010年3月13日現在

学部学科		入学定員	一般入試 方式	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	AOマルデス入試 募集人員	志願者	受験者	合格者
経済学部	経済経営学科	480	E	40	1,379	1,337	183	7.3	25	135	132	26
			A※	175	4,021	3,652	506	7.2				
			C	35	2,113	2,107	206	10.2				
			S	5	109	109	16	6.8				
	計	480		255	7,622	7,205	911	7.9	25	135	132	26
法学部	法律学科	275	E	24	767	753	116	6.5	6	53	52	6
			A	110	1,836	1,636	246	6.7				
			C	36	1,422	1,421	275	5.2				
			S	4	48	48	10	4.8				
	政治学科	155	E	12	317	309	51	6.1	4	27	27	5
			A	58	1,035	937	160	5.9				
			C	24	730	729	143	5.1				
			S	2	13	13	6	2.2				
	計	430		270	6,168	5,846	1,007	5.8	10	80	79	11
文学部	英米文学科	130	E	7	251	242	41	5.9	6	33	33	7
			A	55	690	615	146	4.2				
			C	10	555	554	123	4.5				
			S	2	19	19	5	3.8				
	日本文学科	90	E	6	242	235	39	6.0	3	15	15	3
			A	43	606	536	119	4.5				
			C	8	454	454	89	5.1				
			S	2	15	15	4	3.8				
	国際文化学科	110	E	6	331	326	55	5.9	6	45	44	8
			A	50	826	758	124	6.1				
			C	8	566	566	111	5.1				
			S	2	24	24	6	4.0				
	現代社会学科	110	E	8	496	483	67	7.2	6	39	38	6
			A	46	727	661	133	5.0				
			C	8	589	587	109	5.4				
			S	2	27	27	6	4.5				
	計	440		263	6,418	6,102	1,177	5.2	21	132	130	24
理工学部	物質生命理工学科	130	E	12	158	150	26	5.8	10	28	27	13
			A	43	723	635	100	6.4				
			C	27	865	864	167	5.2				
			S	3	94	94	15	6.3				
	情報科学科	130	E	12	226	219	37	5.9	10	27	27	9
			A	43	595	513	126	4.1				
			C	27	652	652	115	5.7				
			S	3	55	55	13	4.2				
	エレクトロメカニクス学科	130	E	12	247	235	45	5.2	10	20	20	10
			A	43	585	502	103	4.9				
			C	27	738	736	136	5.4				
			S	3	59	59	10	5.9				
	計	390		255	4,997	4,714	893	5.3	30	75	74	32
大学計				1,043	25,205	23,867	3,988	6.0	86	422	415	93

※経済学部A方式は「地歴公民型」と「数学型」の合計です。

●大学院

専攻名		博士前期課程 募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	博士後期課程 募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	経済・マネジメントコース社会人プログラム（博士前期課程 社会人1年制） 募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
経済経営研究科	経済学専攻	6	3	3	3	3	0	0	0	若干名	0	0	0
	経営学専攻	10	15	13	8	3	1	0	0		0	0	0
	計	16	18	16	11	6	1	0	0		0	0	0
法学政治学研究科	法律学専攻	8	3	2	0	4	1	1	1				
	政治学専攻	4	5	4	1	2	0	0	0				
	計	12	8	6	1	6	1	1	1				
文学研究科	英米文学専攻	8	10	10	10	4	2	2	2				
	日本文学専攻	8	10	9	7	4	3	3	2				
	社会文化論専攻	8	3	3	2	4	1	1	1				
	計	24	23	22	19	12	6	6	5				
理工学研究科	理工学専攻 物質生命コース	70	49	49	45	10	2	2	2	若干名	0	0	0
	理工学専攻 情報科学コース		36	36	32		1	1	1		1	1	1
	理工学専攻 エレクトロメカニクスコース		40	40	33		1	1	1		0	0	0
	計	70	125	125	110	10	4	4	4		1	1	1
法務研究科		50	279	254	74								
合　計		172	453	423	215	34	12	11	10				

理工学研究科社会人選抜（博士前期課程・博士後期課程）

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
若干名	1	1	1

※法務研究科は法学未修者・法学既修者合計

●中学校

学年		募集人員	志願者	合格者
第1学年	第１回	男子約 55 女子約 40	346	128
	第２回	男子約 20 女子約 15	496	63
国際学級（４月期入学）	第1学年	男女約 10	67	30
第２学年帰国生編入試		若干名	9	4

●小学校

学年		募集人員	志願者	合格者
第1学年		112	854	112
国際学級	第4学年	16	21	12

●高等学校

学年	募集人員	志願者	合格者
第1学年	男女約 70 名	314	153
帰国生	第１学年若干名	36	12
第2学年編入試	若干名	0	0

成蹊から
お伝えしたいこと

学園 TOPICS

国際教育センター国際賞

国際教育センターでは、本学園の学生、生徒、児童の国際交流活動を奨励することを目的とした褒賞制度を設け、国際研究賞・国際交流賞の各分野から表彰しています。

応募は、自薦または他薦によるものとし、国際研究賞の対象は、主として国際性に富んだ研究および国際的に高い評価を受けている舞台で活躍した者、国際交流賞の対象は、主としてスポーツ、ボランティア活動、地域活動などを通じた国際交流活動において成果を上げた者、または本学園学生などによる団体としています。

二〇〇九年度、大学においては一名が大学国際研究賞を受賞し、小学校においては、十九名が国際交流賞各賞を受賞し、副賞を贈呈いたしました。

100th ANNIVERSARY 1912-2012
『心の力』を、未来へ。
「教養ある豊かな人間性」で、時代をひらく。

創立100周年記念行事推進室からのお知らせ

2012年の創立100周年記念行事のメインコンセプトが「『心の力』を未来へ。」、サブコンセプトが「『教養ある豊かな人間性』で時代をひらく。」に決まりました。このコンセプトのもと、さまざまな記念行事を開催し、成蹊教育の価値を内外に発信して参ります。また在校生、卒業生からの記念行事企画も募集しております。コンセプトの詳細と記念行事企画募集については、ホームページにてお知らせする予定です。

●学園広報には今号より、創立100周年記念特集ページを掲載しています。成蹊学園の100年の歴史を振り返る「百年十話」と、これからの100年に向けた試みを紹介するコーナーをそれぞれ10回のシリーズでお届けします。

●3月23日の「建学の日」には、キャンパス内に創立100周年とそのコンセプトをお知らせするフラッグを掲げました。ロゴマークがアレンジされたデザインは新緑に映え、キャンパス内の景色を華やかにしています。お近くにお越しの際には、ぜひともご覧ください。

学園組織・役職者一覧

●学園組織一覧

法人	総務部	総務課	0422-37-3503
		人事課	0422-37-3505
		広報課	0422-37-3517
	財務部	経理課	0422-37-3508
		管財課	0422-37-3511
	健康支援センター	健康支援センター事務室	0422-37-3518
	国際教育センター	国際課	0422-37-3536
	創立 100 周年記念行事推進室		0422-37-3941
大学	企画運営部	企画運営課	0422-37-3531
		研究助成課	0422-37-3705
	教務部		0422-37-3553
	学生相談室		0422-37-3807
	学生部	学生生活課	0422-37-3539
		大学保健室	0422-37-3518
	図書館	図書館事務室	0422-37-3544
	情報センター	情報システム課	0422-37-3611
	アジア太平洋研究センター		0422-37-3549
	キャリア支援センター	キャリア支援センター事務室	0422-37-3537
	入試センター	入試センター事務室	0422-37-3533
中学・高等学校		中学・高等学校事務室	0422-37-3849
小学校		小学校事務室	0422-37-3838
内部監査室			0422-37-3902

●役職者

成蹊学園

理事長	佃　和夫
専務理事	加藤　節
総務部長 兼 創立100周年記念行事推進室部長	茂木　聡
総務部担当部長 兼 創立100周年記念行事推進室担当部長	伊藤　昌弘
財務部長	早野　潔
健康支援センター長	小川　隆申
国際教育センター所長	井上　智夫

成蹊小学校

校長	金納　善明
教頭	大場　繁

成蹊中学・高等学校

校長	両角　雄功
教頭	吉崎　純二
教頭	跡部　清

成蹊大学

学長	亀嶋　庸一
副学長	川越　俊彦
経済学部長 大学院経済経営研究科長	藤垣　芳文
理工学部長 大学院理工学研究科長兼工学研究科長	廣田　明彦
文学部長 大学院文学研究科長	門口　充徳
法学部長 大学院法学政治学研究科長	小林　登
大学院法務研究科長	萩澤　達彦
企画運営部長兼入試センター事務部長	高浜　武則
企画運営部担当部長 兼 創立100周年記念行事推進室担当部長	鐘川　誠司
教務部長	秋庭　正典
学生相談室長	牟田　悦子
学生部長	三浦　國泰
図書館長	渡邉　一衛
情報センター所長	岩﨑　学
アジア太平洋研究センター所長	中神　康博
キャリア支援センター所長	北川　浩
キャリア支援センター事務部長	三浦　俊哉
入試センター長	奥野　昌宏